

令和八年度「家族の詩」入賞作品

市長賞

「ひいじいちゃんの手」

岡崎中学校

三学年

増本

遥

教育長賞

「うちの三人官女」

新居中学校

三学年

梶川

莉香

明湖会長賞

じいじとみたらし団子

新居中学校

二学年

都筑

詩

優秀賞

好きな部屋

鷺津中学校

三学年

宮野

月渚

ずっーと大好きだよ、福留家

鷺津中学校

三学年

福留

希生

家族の力

白須賀中学校

一学年

佐藤

夏菜

努力賞

当たり前だった送り迎え

湖西中学校

二学年

夏目

葵衣

当たり前

白須賀中学校

一学年

菅沼

帆南

大切な家族

白須賀中学校

一学年

内山

芽依

鷺津中学校

一学年

岸本

雄翔

市長賞

「ひいじいちゃんの手」

岡崎中学校 三学年

増本

ますもと

遥

はるか

私のひいじいちゃんは百才
手はゴツゴツのしわだらけ
寝ている時間が長いけど

私が声を掛けると目を覚ます
そして「ヨーキタ ヨーキタ」と
頭をなでる

戦時中は武器を持ち
朝と晩は「神様 仏様」と手を合わせ
生きるために畑を耕し 稲を刈り
魚がかれば網をひく
ひっきりなしに働いてきた
やさしくて大きくてあたたかい
ひいじいちゃんの手

帰り際 やっぱり私の頭をなで
「カシコクナレ カシコクナレ」という
いつかきつと賢くなつて
今度は私が紡いでいくよ
ひいじいちゃんの生きてきた道

教育長賞

「うちの三人官女」

新居中学校 三学年

梶川 かじかわ

莉香 りか

小さい頃はただただ綺麗だと思っていた

おひな様

十五才になる私には、三人官女が少し違って見える

真ん中でどつしりと構える一人、その両脇でしっかり支える二人

三人揃って、ひとつの世界をつくる

それはなんだか、それぞれの未来へと歩き出す私たち三姉妹の姿にどこか似ている

進路や受験勉強に息詰まる日々。

そんな私に元気と笑顔をくれるのは、いつも

二人の妹たちの存在だ

これから進む道が違っても。どんなに大変なことがあつたとしても。

私はお姉さんとしてずっと二人を応援する

二人の存在を心の支えに、前を向いて

未来へと歩んでいく

明湖会長賞

じいじとみたらし団子

新居中学校 二学年

都筑 つづき

詩 うた

みたらし団子を見ると、じいじを思い出す
じいじは僕の曾祖父

最期はまるで、子どもに戻ったかのようにだった

ある日、三本入りのお団子の真ん中が無く
なっていた

「じいじだ！」

なぜ真ん中から食べるのか
隅から食べるのがマナーじゃないか
不満そうな幼い僕と
少しさみしそうな母

時がたち

ふと、あのときの答え合わせができるとき
がきた

ああ、そうか

じいじは、認知症だったのか

「真ん中からお団子、食べちゃおうかな」
は、今や我が家の鉄板ネタだ
みんながじいじを思い出して笑う
じいじは覚えていないかもしれないけど、
僕達は覚えている
それでいい

優秀賞

好きな部屋

鷺津中学校 三学年 宮野 みやの 月渚 るな

今日もまた節電要請だ

それぞれ自室はあるけれど

節電要請出た時は

電力もつたいないからね

みんなリビング集合ね

リビングは

食事の匂い

飼っている亀や金魚の水音

母と父のお喋り

色んな匂いと色んな音

これがどんなアロマやサウンドより

癒されたりするんだな

優秀賞

ずっーと大好きだよ、福留家

鷺津中学校 三学年

福留^{ふくどめ} 希生^{きき}

冷蔵庫のシールは増えなくなつて

代わりにスマホにプリクラが挟まつた

浴室で奪い合つたバスボムは

無機質な四角形に変わつてしまった

キャラクターシャツじゃなくなつちやつて

お洗濯の仕分けが難しいよ

家族の変化はすてきなことで

大きくなるつていいことなんだけど

すこしさびしくなつちやうときもある

社会のどっかと一緒になつて

みんなの色が無くなつちやう気がする

いつか離れ離れになるその日まで

大事にしたいとおもうんだ

優秀賞

家族の力

白須賀中学校 一学年

佐藤 さとう

夏菜 なつな

家族ってすごいな

友達にできない相談

先生にできない相談

言いづらくたって

なんでも分かる

家族っていいな

いつも温かい太陽みたい

私は水という言葉をもらって

生きていくひまわりだ

努力賞

当たり前だった送り迎え

湖西中学校 二学年

夏目 なつめ
葵衣 あおい

真夏の太陽が照りつけている日

嵐のような風がふいている日

急に土砂降りの雨が降ってきた日

私がねぼうをしてしまった日

どんな時も父と母は送り迎えをしてくれた

帰りがおそい時には心配して何度も電話をか

けてくれた

そして笑顔で私に

「練習おつかれさま。」

と声をかけてくれた

しかし時にはその優しさに反抗してしまうこ

ともあった

あの頃は当たり前だと思っていた自分がいた

今思うと父と母の協力があってこそだったの

だなと常々感じる

改めてお父さんお母さん、いつも私のことを

考えて協力してくれて本当にありがとう

努力賞

当たり前

白須賀中学校 一学年

菅沼 すがぬま

帆南 ほなみ

これが普通だと思っていた

一緒に暮らすことが

京都に行ったお姉ちゃん

大人になってくお姉ちゃん

優しさあふれるお姉ちゃん

あいたい

あいたい

あいたい

あいたい

一緒にいる時はしらなかった

それが当たり前だと思っていた

当たり前は当たり前じゃない

この当たり前がずっと続きますように

努力賞

大切な家族

白須賀中学校 一学年

内山 うちやま
芽依 めい

悲しいときは

そつとよりそつて

楽しいときは

仲よく遊んで

なにを話しているの 君は

ニヤー ニヤー

ニヤー ニヤー

鳴くことしかできないけれど

きつと心は 通じてる

絶対心は 通じ合ってる

近くて遠い 大切な家族

努力賞

鷺津中学校 一学年

岸本 きしもと

雄翔 ゆうと

初大会、家族は来れない
父仕事、姉高校、弟試合

卓球台の上でミスをした
どこからか「ドンマイ！」
見覚えのある声がした
母がいた。大きく手を振っていた

打ち返すたびに胸が鳴る
応援席の母を探した
ガッツポーズを返していた。

ピンポン、ピンポン、
「打つ」「跳ねる」
ピンポン、ピンポン、
まだ続く。
コロン。終わった。負けた。
「ありがとうございました。」
そうして会場から出た。

帰る時、カレーを食べて、バスを待った。
やっと家についた。

ピンポン
「ただいま・・・」
「お帰り」姉が待っていた。
電話が鳴った

「お疲れ様」父だった
大会中、会話のリレーが続いていた。
家族はずっと、僕を応援してくれていた。